
long and deep X'mas

あいぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

l o n g a n d d e e p x · m a s

【Nコード】

N 0 7 5 7 D

【作者名】

あいぽ

【あらすじ】

幼少の頃の記憶を失った一ノ瀬由佳里は、今年のクリスマススイヴに拳式を控え幸せな日々を過ごしていた。しかし、由佳里の前に謎の男直哉が現われ……………！？あいぽ初挑戦の本格ミステリー小説！！12月24日に全ての謎は解け『愛の奇跡』が世界を包む！？

序幕

愛は嵐を見つめながら揺るぎもせず
いつまでもしっかりと立ち続ける燈台なのである

シェイクスピア
『ソネット集』より

1997年

12月24日

『なあ由佳里……。小さな恋のメロディって映画知ってる…!?!?』

揺れるキャンドルの灯火が、まるで幻想的に二人を包み込んでいる部屋で、まだ中学生ほどの幼き男の子と女の子が、クリスマスに愛を誓いあっていた。

その部屋は、女の子の方の部屋らしく、辺りには可愛らしいヌイグルミが飾られていた。

小さな恋のメロディ！？

女の子は、不思議そうに男の子に問うた。

『うん。その映画ってさあ……小学生くらいの男の子と女の子の恋の話なんだけどね……オレすっげえ感動したシーンがあるんだあ……』

どんなシーン！？

『ある日二人は、【50年間妻を愛した】って墓碑に彫ってあるのを見つけて読むんだ……。』

.....

『そしたら女の子の方がさあ……、50年も愛せるのかしら!?!?つて男の子に聞くんた。』

そうよ……そんなに愛せる訳ないわ……。

女の子は無邪気に笑っていた。

『……………』

『でもな……まだ幼ない男の子は自信に満ちた表情で、その女の子に言っんだ。キミなら愛せるよってね。』

……………。

『なあ由佳里……。オレも……。由佳里なら……。50年先もきつと愛してるって自信もって言える。』

『約束するよ……。50年先のクリスマスも、こうやって二人でこのメロディに包まれている事を……。』

『メリークリスマス』

男の子は、ポケットから、そっとオルゴールを取りだし開いた。

ビーズの『若葉の頃』が繊細なオルゴールの音となり、幼き二人の恋を優しく包み込んだ。

ドワッシャ アアアアンー！

急に、二人の幸せな時間を邪魔するかのようになり、女の子の母や父がいる1階のリビングからもの凄い音が聞こえてきた。

驚いた二人は、リビングの部屋の様子を見に行こうと、自分たちがいた部屋の扉を開けた瞬間身動きができなくなった。

！！！！

なんと下のリビングは、燃え盛る火の海となっているのだ。

家の柱は、真っ赤に染まった炎を吹き出して、物凄い音を立てて崩れてゆく。

イヤアアアア！！

悲痛にも似た少女の悲鳴も、炎により崩れ落ちるそこいらじゅうの壁や柱によってかき消される。

幼き二人は、迫りくる炎から逃れるため、玄関へ一気に走り抜けようと、二人で手を強く握り合いリビングを見下ろした時だった。

メキメキと嫌な音を立てながら、周りの物を燃やし続ける炎の中に、不気味にカメラを握りしめた一人の男が立っている影が見えた。

l o n g a n d d e e p

X · m a s

詞 川嶋あい

長い長い夜が来たね

街はイルミネーション

紺色の空に照らされた

幾つもの願いたちよ

舞い降りる天使のように

そつと冬が輝く

恋人たちは灯火を

待ちわびて帰らない

白い雪が告げる一夜

どんな奇跡が訪れる？

ベルの音が鳴り響く街に

君の瞳は七色で

そつと揺れるよ

思い出のキャンドルライト

いつか夢見た

2人だけの世界は

l o n g a n d d e e p x - m a s

どうかもう少し

昇らないで朝日よ

l o n g a n d d e e p X · m a s

a n d w h i t e X · m a s

序幕（後書き）

こんにちわ

あいぽです

さあいよいよ始まりました『クリノベ2007』

この物語は、あいぽ初の本格ミステリーへの挑戦です！！

読み進めて行く程に、主人公の由佳里の周りに様々な登場人物現れて謎が交錯してゆきます。

全ての謎は、12月24日に解けるのですが、物語の謎を解くヒントは、あいぽが大好きな川嶋あいさんの『long and deep x'mas』の歌詞に隠されてます。

なんとこの歌詞の全てが、実は……………！？（笑）

12月24日クリスマスイヴまで、是非是非お付き合いの程を三口シクお願いします

第一幕 車イスのシンデレラ

2007年

11月20日

品川プリンスホテル
鳳凰の間 控室

「……………ねえ…透さん。記者会見だなんて、やっぱり私緊張するよ…。」

シャンデリアの目映い光に包まれた隣の部屋とは違い、殺風景な控室で、20歳くらいの車イスの女性が、先ほどから落ち着きなく少し震えていた。

「なあゝに。すぐ終わるさ由佳里。君は、僕の横でじっとしてればいい。」

震える車イスの女性の肩に、両手をポンツと当て、先ほど透と呼ばれた男は優しくささやいた。

車イスの女性の名前は、一ノ瀬^{イチノセ} 由佳里^{ユカリ}。
そして男の名前は、朝比奈^{アサヒナ} 透^{トオル}。

幼少の頃から、ずっと付き合ってきた二人は、今年の12月24日のクリスマスイヴに、晴れて挙式を上げる事になっていた。

しかし、このカップルは、どこにでもいるごく普通の挙式を控えたカップルとは訳が違っていた。

なぜならば、透の父である朝比奈 憲三は、司法官庁つまりは検察庁の中でも、非常に有能かつ、メディアなどにも取り上げられているほど有名な検事であった。

朝比奈 憲三

彼の手にかければ、どんなに小さな調書からも『有罪判決』へと導く、まさに悪を漏らさず正義を貫く検事であった。

また、息子である朝比奈 透も、父と同じ道を歩き、弱冠25歳にして検事を勤めており、あの朝比奈 憲三の息子という事もあり、検察庁では『若きプリンス』と期待されていた。

つまりは

あの朝比奈 憲三の息子でもある、この『若きプリンス』が結婚するという話題は、マスコミたちの格好のネタとなり、記者会見まで開く運びとなったのだ。

しかも

この『若きプリンス』と、婚約者の一ノ瀬 由佳里は、一種の因縁めいた関係すらもあった。

透と由佳里は、同じ中学校で、サッカー部に所属しており、そこでキャプテンをしていた透は、3つ下のマネージャーの由佳里にずっと恋心を抱いていた。

また、透の父、朝比奈憲三が扱った事件で、『世田谷の放火殺人事件』という事件があった。

今からさかのぼる事10年前の
クリスマスイヴ

世田谷に住む、ある一家の家屋が放火により全焼した。それにより、そこに住む夫婦は焼死。

その夫婦のひとり娘だけは奇跡的に助かったが、当時まだわずか1歳だったその少女は、この大火によりPTSD（心的外傷後ストレス）を起こし、それまでの記憶を全て失ない、精神的障害からか両足が動かなくなり、車イスでの生活を余儀なくされてしまったのだ。

そして

その少女こそが、透の婚約者の一ノ瀬 由佳里なのだ。

そもそも、この由佳里という少女は非常に不幸な生い立ちを背負っていた。

由佳里が生まれたのは富山県の射水郡という場所だったが、由佳里の実の両親は、由佳里が生まれからすぐに失踪してしまった。

その後、由佳里は富山にある孤児院で育てられたが、10歳の時にその院長先生の紹介で東京に住む一ノ瀬家に養女として引き取られた。

しかし

この『世田谷の放火殺人事件』により、由佳里は一ノ瀬の父と母も失ってしまい、記憶喪失と両足の不自由という障害に加え、天涯孤独にもなってしまったのだ。

だが……

不幸中の幸いとはこの事だろうか!?

なんと、由佳里を引き取る事に、朝比奈 憲三が名乗りを挙げたのであった。

当時、憲三は由佳里という少女に対して一種の運命的なものも感じていたのだ。

実は、憲三が担当した『世田谷の放火殺人事件』は、一時は迷宮入りしかけていた。

出火場所が非常に奇妙だった事と、犯行があまりにも衝動的だったと思われたため、犯人の手がかりを全く掴む事ができなかった。万策尽きた憲三は、とにかく何か手がかりになる事はないかと、入院中の由佳里を献身的に見舞っていた。すると、ある日の事、記憶を失ったはずの由佳里が、犯人をしっかりと覚えていると、憲三に目撃証言をしたのだ。

これが事件の解決の糸口になった。

結果、憲三は、解決困難だと思われていたこの事件で、由佳里の証言により容疑者を導き出し、見事に有罪判決を勝ち取る事ができた。

つまり、由佳里は朝比奈家にとって、透が恋する女の子であり、憲三が恩を感じる女の子でもあり、とてま大切な大切な存在であった。

そのような事から、由佳里は、不幸な生い立ちを背負いながらも、朝比奈家で憲三と透の深い愛情に包まれ育てられ、ついには今年のクリスマスに、透と挙式を上げる事にまでなったのだ。

「……そろそろ。時間かな…。透…由佳里くん…準備はいいかな！？」

憲三は、腕時計に目をやったあと、透と由佳里に優しく微笑んだ。

本日の記者会見は、透と由佳里だけではなく、憲三も出席する事になった。

「……大丈夫だ。由佳里。安心して。」

先ほどから、ずっと緊張している由佳里の頭を、透はポンとおどけて叩いた。

「……透さん…」

「ははっ。やっと笑ってくれたね、由佳里。やっぱり由佳里は笑ってる顔が一番可愛いよ。」

由佳里は、透のその言葉に、少し照れながらも幸せそうに笑ってい

た。

「……私。こんなに幸せでいいのかな……！？ねえ透さん……。過去の記憶もない…車イスのこんな私と結婚して、透さんのこれからの人生の足手まといにならない……！？」

「……ばか。何言ってるんだよ由佳里！！君には過去がなくても、これから一緒に二人で未来をつくれればいいじゃないか！！それに僕は……」

透は、そつとしゃがみこんで、車イスの由佳里と視線を合わせ、真剣な眼差しを向けた。

「……むろん、君は覚えてないだろうけど、実は君が記憶を失う前の10年前のクリスマスイヴに、君に告白をした。僕は中学の頃からずっと由佳里の事が大好きでたまらなかったんだ。」

「……10年前のクリスマスイヴに……透さんが私に告白をした！？」

「……ああ。」

透の真剣な眼差しの中に、由佳里は、自分への溢れる愛を感じ、思わず涙がこぼれた。

「……………ありがとう。透さん。……………私、今日ほど自分の記憶喪失を憎んだ事はないわ……………」

「どうしたんだよ由佳里、急に……………!？」

「……………だって、10年前の透さんの告白……………覚えておきたかったなあ……………。その時……………私……………幸せそうだったでしょ。」

「……………」

由佳里の愛らしい涙に、透は胸の奥から由佳里を愛おしく感じぎゅっと抱きしめた。

透も由佳里も、これ以上ないほどの幸せだった。

透と由佳里の結婚に関して、マスコミは

『車イスのシンデレラ……………若きプリンスと結婚』

と騒ぎたてていたが、あまりにも不幸だった由佳里の生い立ちを考えると、検事としての成功を将来有望視されている透との結婚は、まさにシンデレラストーリーだった。

……しかし……

シンデレラの靴は、あくまでもガラスに過ぎない。

ちょっとした事で……

脆くも壊れてしまう事を……

この時には誰も

気付いていなかった。

第二幕 陽の当たらない場所

「……ねえ直哉。なんであんなセックスの時いつもシャツ脱がないの!？」

そこは、まるで陽の当たる場所を避けているかのように、どんよりとした無機質な部屋の中だった。

先ほどセックスを終えたばかりの女は、ベッドの上に足を組み不服そうにタバコをふかしていた。

部屋の片隅に唯一ある小さな窓から、少し差し込む朝の光も眩しいのか、その直哉と呼ばれる男は、女を無視してベッドから立ち上がりブラインドを閉める。

そして冷蔵庫からサンドイッチを取り出したかと思うと、器用に口にくわえながら、缶コーヒーを2本片手づつに持ち、ベッドに座る女に運んだ。

「飲めば……。」

一言だけ呟き、直哉はテレビのスイッチを入れた。

「いい加減にしてよ！！いつもそう！！あなたは私なんか愛してない！！ねえ……直哉……私たち出逢ってもう3年でしょ！！もっと笑ってよ！！もっと喋ってよ！！」

「……………」

「……私……あなたの全てを知りたいの！！もっと自分を見せてよ！！私……あなたを誰よりも愛してるのよ！！」

「……………」

ヒステリックに興奮する女とは真逆に、直哉は表情を一切変えずに見えてるのか見えてないのか分からないような力のない目で、テレビを見つめていた。

「ねえ……直哉……。あなたの心には一体何があるの！？何を見てるの！？ねえ……教えてよ！！私……こんなに直哉を愛して

るのよ!!」

ついに女は泣きくずれ、テレビの前に座り込み蒼白く照らされた直哉の背中にもたれかかる。

朝のワイドショーが繰り広げられていた。

『車イスのシンデレラ……若きプリンスと結婚!!』

ワイドショーでは、朝比奈透と一ノ瀬由佳里の結婚記者会見を派手に報道していた。

!!!!

さっきまで全く力を感じられなかった直哉の目が、その報道を目にしたとたん……

一瞬鋭くなったかと思うと小さく呟やいた。

「…………結婚なんてブチ壊してやる!!」

何かに怒り…

何かに悲しんだような憂いの目が、次第に憎悪に満ちた眼差しに変わり、気付けは手に持っていたコーヒーの缶を握り潰していた。

「ははは！！ 直哉あなたナニ！？ そんな怖い顔してテレビ睨みつけてんのよ！！ テレビの中の幸せそうな二人と自分を比べて嫉妬でもしてんの！？」

「……………」

「朝比奈透って言ったけ…その男！？ 将来を約束された検察庁のエリートらしいよ！！ どう考えたって、あたしらにはかなわない人生じゃん！！ あんたは歌舞伎町の三流ホスト…そして私はしないデリヘル嬢！！ どうせこの先、あたしらは陽の当たる場所なんて歩けないんだから……………！！」

女は、直哉の首に華奢な腕を回して直哉をからかう。

「……………」

「ねえ…………直哉…。もっとあたしを愛して…」

女は、そのまま直哉の耳元に顔を近づけ、そつと囁く。

「……悪い。沙織……。オレ……行かなきゃ!!」

直哉は、女の手を振り払い立ち上がったかと思うと、何かにとり憑かれたように、そそくさと着替えを始め出した。

その表情は、さっきまでの無表情だった直哉とはうって変わり、まるで死に急ぐような緊迫した険しい表情だった。

「……ちょッ!! 直哉あんたどこ行くのよ!!」

沙織と呼ばれた女は、直哉の背中を追いかけようとするが、今までみた事のなかった直哉の迫力に動けなくなってしまった。

直哉が家を出たあとの扉が閉まる音が、無機質な空間に虚しく響いた。

何が起こったか分からない沙織は、ただその部屋で呆然と独り立ちすくむしかなかった。

うす暗い部屋の中で、幸せそうな記者会見の模様が繰り広げるテレビだけが、蒼白く不気味な光を放っていた。

「品川プリンスホテルまで……！！ 忙しいで……！」

自分のアパートを出た後、直哉はすぐにタクシーに飛び乗った。

車内に容赦なく差し込んでくる外の陽の光が眩しいのか、大きな帽子をさらに深くかぶり、小さく屈みこんだ。

直哉を乗せたタクシーは、バックミラーに怒りで爆発しそうな鋭く尖った直哉の目を映し、品川へ向かい静かに走り出した。

第二幕 陽の当たらない場所（後書き）

さあついに謎の男直哉が現れました！！
彼は一体……！？

次回直哉が由佳里に……！！

「……………ちよっ…近づいてこないで！！ 大声出すわよ！！」

直哉は両手をポケットに突っ込み、腰を屈めながら車イスの由佳里に視線を合わせじわじわと近づいてゆく。

第三幕 忍びよる影

お楽しみに！！

第三幕 忍びよる影

「ふう、やっと終わったね。」

品川プリンスホテルに面しているカフェで、由佳里が晴れ晴れした笑顔を透に向けた。

「ははは。由佳里はホントに照れ屋なんだね。」

由佳里の無邪気な笑顔を見て、透は幸せそうに微笑んだ。

記者会見が終わった後、透と由佳里は、近くのカフェでランチを取っていた。

二人が食事をしているテーブルは外にあり、キラキラとした秋の日差しが、まわりの木々の緑を伝い木漏れ日となり美しく輝いていた。

「……まあ。由佳里の照れ屋は今に始まった事じゃないけどね。」

「……そっか。私は10年前の放火事件のショックで幼少の頃の記憶を無くしてしまったみたいだけど、透さんは…記憶をなくしてしまっ前の私も知ってるんだもんね。」

「まあね。知ってるって言っても、君がこっち（東京）に来てからの中学時代の事だけだね……。」

「なるほど……。確か…私って小学生の頃は、富山の施設で育てられてたんでしょ。」

「……うん。君が生まれ育ったのは富山だよ。」

透は、由佳里にゆっくりと話し始めた。

「例の事件をきっかけに、一ノ瀬のご両親を亡くした君を、朝比奈家で引き取る事を決めた時……実は僕は、君が育った施設に、父と一緒に一度ご挨拶に行った事があったんだよ……。その園長先生はね、確か熱心なクリスチャンでね…とても真面目でまっすぐな方だったよ。」

「……………そうなんだ。」

由佳里は、自分の奇妙な運命を振り返ってしまったのだろうか、少し寂しいような表情で透に微笑む。

「……………」

そして、寂しそうな由佳里の表情に気づいたのか、由佳里にとってデリケートな部分に思わずとも言えども、触れてしまった透は神妙な面持ちで由佳里を見つめる。

「ねえねえ。中学の頃の私ってどんな女の子だったの!？」

そんなぎこちない時間にピリオドを打ったのは由佳里だった。

愛する婚約者に気を遣わせまいと、由佳里は無邪気に笑いながらあえて透に尋ねたのだ。

由佳里とは、そんな女性だった。

自分がいくら辛い過去を持っていても、決してそれで周りに心配などはかけたくはなく、むしろそんな辛い過去も吹き飛ばすくらい、常に笑顔を絶やさず、周りに元氣を与えて生きてきた。

きつと透も、そんな由佳里の健気さや前向きさが何よりも愛おしくたまらなかったから、由佳里がどんなハンディを背負っていても、ずっと由佳里を支えてきたのであろう。

「……そうだなあ。中学生の頃の君は、部員たちの面倒見がとてよく、いつも笑っていて、僕たちサッカー部員たち全員の憧れだったなあ。」

「きゃははは。……それでその憧れの女の子のハートは、10年前のクリスマスイヴに透さんに奪われた訳だ。」「……ばか。」

二人の笑い声は、昼下がりの木漏れ日で美しく煌めくオープンテラスに優しく響き、二人を幸せすぎるほどに包んでいた。

しかし

その幸せそうな時間を、怒りに満ちた目で見つめている眼差しが、周りの木々の中から怪しく光っている事に、二人は全く気付いていなかった。

「……由佳里。ちょっとタバコ買ってくるね。一人で大丈夫!？」

「うん。平気だよ。車イスだからって、甘くみないでよね。」

由佳里はおどけながら、車イスを器用に右左と自分の身体のように操る。

「はははは。分かった。分かった。じゃあ、ちょっと行ってくるね。」

「うん。行つてらっしゃい。」

由佳里は、小走りに駆けて行く透に、笑顔で手を振った。

「……………」

さっきまで輝いていた日差しが、急に雲により遮られ、辺りを大きな陰で包み込んだ。

「……………少し寒くなったかな…。」

由佳里は横に置いてあったバックから、ストールを取り出し肩に掛けた。

「……………ねえ…。結婚するってどんな気分!？」

!!!!

まるで由佳里が一人になったのを見計らったかのように、急に由佳里に問いかける男の声がした。

「……………だれ!？」

恐る恐る声がした方向へ顔を向けると、タイトな黒いスーツに身を

包み、大きな帽子を深くかぶった直哉が立っていた。

「ねえ教えてよ。結婚するってどんな気分！？ 楽しい……！？」

「あなた……ダレよ！？」

由佳里は、急に現れた直哉に怯え、両手で車イスのタイヤを回し、後ずさりする。

しかし、そんな事おかまいないしに、直哉は両手をポケットに突っ込み、腰を屈めながら車イスの由佳里に視線を合わせじわじわと近づいてゆく。

「結婚するってさぁ……。今まで付き合ってきた男を裏切り、夫になる男にその身を捧げんだろ……！？」

「………ちよっ…近づいてこないで！！ 大声出すわよ！！」

「………ねえ……。あんたも今まで何人もの男と付き合ってきたんだろ！！ その男たち裏切って自分だけ幸せに結婚するってどんな気分なんか教えてよ……！！」

「………ふざけないで！！ ちよつとあっち行きなさい！！」

直哉がいきなり、由佳里の肩を掴んだ時だった………

「おい！！ 何してるお前っ！！」

タバコを買いに行つた透が、由佳里の前に不審な男がいる事に気づき声を張り上げ走ってきた。

「なあ… 由佳里！！ 絶対お前らの結婚ブチ壊してやるからな！！」

透が戻つて来たのに気づいた直哉は、由佳里の耳元でそう呟やくと走り去つて行つた。

「大丈夫か！？ 由佳里！！」

透は由佳里を力いっぱい抱きしめる。

透の腕の中で、由佳里は小さく震えていた。

あのヒト……

……私の名前を知っていた！？

透の腕の中で、由佳里は言いようのない恐怖に包まれていた。

第三幕 忍びよる影（後書き）

こんばんわ

あいぽです

さあ今回は、由佳里の過去が少し明らかになりましたね。

また……

一体直哉とは……！？

さて！！

次回ですが、いよいよ由佳里の過去が明らかか……！！

「どうした！！由佳里！！」

「透さん……。私は…私は一体……！？」

突然に記憶の断片のようなものが蘇った由佳里は、一瞬何が起こったのか分からなくなり、小さく震えていた。

第四幕 フラッシュバック

お楽しみ！！

第四幕 フラッシュバック

「……少し落ち着いたか！？ 由佳里。」

「……………うん。」

その日の夜、朝比奈家に戻った透と由佳里は、昼間の出来事をリビングで考えていた。

「由佳里の名前を知ってる人間なんだったら……………もしかしたら中学の時の人間かもしれないなあ。」

「……………中学生の頃の！？」

「ああそうだ。君は中学ではかなりの人気者だったんで、もしかしたら今日の僕らの記者会見を見て、やっかんで品川まで飛んできたのかもしれない。」

透は中学生の頃の卒業アルバムを確認しようと、卒業文集などその頃のものがいっぱい詰まった段ボール箱を倉庫から取り出し、両手で抱えリビングに歩いてきた。

「透さん……………大丈夫！？ 重たそうよ……………その箱。」

「バカにするなあ……………。それでも昔はサッカー部で鍛えてたんだからな。はははは！！！」

透はよろけながら、由佳里に笑いかける。

「……………あっ！！」

ガッシャーン

やはり、その段ボールは重かったのが、ついに透は箱を落としてしまい、箱の中をリビングにぶちまけてしまった。

その時だった

くくく

くくく

その箱の中にオルゴールが入っていたらしく、突然オルゴールが音楽を奏で始めた。

!!!!

……………これは!?

由佳里は、ふとそのオルゴールの音に懐かしさを感じ、床に転がっていたオルゴールを広い上げる。

「……………ねえ透さん!? このオルゴール、透さんの!?!」

「……………ん? これは確か……………由佳里が記憶を失うきっかけになってしまった、10年前のあの事件の夜、君が助け出されて病院に運ばれた時にずっと大切そうに握りしめていたものだよ。」

「……………」

「私が、あの時の火事から助け出された時に、ずっと握りしめていたもの……………!?!」

由佳里は懐かしそうにそのオルゴールの音色に耳を傾ける。

オルゴールが奏でるビーギーズの『若葉の頃』が、由佳里の身体を暖かく包み込んだ。

……………

……

…

『約束するよ……。50年先のクリスマスも、こうやって二人でこのメロディに包まれている事を……。』

急に由佳里の頭の中に見知らぬ男の子の声が聞こえてきたかと思うと……

次の瞬間

脳裏に、緑で溢れる山の景色が広がる。青空が広がり、草木が香るその場所の向こう側には何か博物館のような建物が見える。

そして、そこで無邪気に駆け回る幼き子供たちの声。

『ねえ…先生い。なんで子供は結婚できないの！？ オレ、由佳里の事大好きなんだよ』

『そうよ。そうよ。私も愛してるよ。』

先生と呼ばれる青年に話かけている幼い男の子と女の子。

まだ小学生くらいの幼い由佳里が、男の子と手を繋ぎその青年の前で無邪気に笑っていた。

…

.....

.....

「.....由佳里……。おい由佳里……。どうしたんだよ!!」

!!!!

「.....!? 私は……」

オルゴールの音色に包まれた瞬間、突然失った記憶の断片がフラッシュバックした由佳里は、透の声で現実呼び戻される。

「.....」

「どうした!!由佳里!!」

「透さん……。私は……私は一体……!?」

突然に記憶の断片のようなものが蘇った由佳里は、一瞬何が起ったのか分からなくなり、小さく震えていた。

「どうした!! どうしたんだよ!! 由佳里!!」

苦しそうに頭を抱え込む由佳里に驚いた透は、由佳里の瞳を見つめ必死に心配する。

「オルゴールの音色を聞いているうちに、なんか懐かしい景色が頭に浮かんだの……。」

「懐かしい景色……!?!」

「……うん。もしかしたら、失ったていた記憶の一部かもしれない……!?!」

!!!!

その言葉に一瞬驚いたように透は由佳里を見つめる。

「記憶が……戻ったのか……!?!」

一言一言かみしめるように、透は由佳里に問いかける。

「……いや……。なんか一瞬だけ……遠い昔の自分を見た気がする。まだ小学生くらいの私……。」

「……………」

由佳里のその言葉に、透は少し考え込む。

「……なあ由佳里。由佳里は……自分が失った過去の記憶……やっぱり気になる？」

「……うん。」

「……………」

「私は一体どんな風に生きていたのか……。そしてどんな人たちと関わりを持っていたのか、やっぱり気になるな。」

少し落ち着ついてきた由佳里はゆっくりとした口調で透に話した。

「けどさあ… 由佳里。僕たちはこれから、結婚して二人で未来を作っていくんだから、今のままでもいいんじゃない!? 由佳里にとって大切なのは今までではなく、これからじゃない!? これから二人で作ってゆく未来。」

「…………… けど。けど…………… 透さん。私は… 過去になんか大切なものを忘れて生きてきているのかもしれない!？」

「…………… 過去に忘れもの!？」

その言葉に、透の表情は少しこわばる。

過去の記憶を失ってから由佳里の記憶にあるのは、透と過ごした

思い出だけだ。

しかし

もしも、由佳里が過去を思い出してしまったら……！？

透は、自分の知らない由佳里の過去に少し嫉妬心を覚えた。

「過去なんて…いつかは時の流れに埋もれて消えてゆく…きっとそんなものさ」

まるで過去へ引き寄せられてゆきそうな由佳里の手を、透はそっと握り優しくささやく。

「なあ……由佳里。二人で素敵な未来を作ってゆこう。」

「二人で素敵な未来かあ。」

「ああ、二人に必要なのは未来だ。」

気が付けば、透は由佳里の手をしっかりと握りしめながら由佳里を抱きしめていた。

しかし…

二人の愛を少しずつ大きなものにしてゆこうとする朝比奈家を、まるで嘲笑うかのように外は秋の木枯らしが吹き荒れていた。

肌寒い秋の風が容赦なく吹きつける朝比奈家のリビングには、外から見ると暖かそうな明かりを放っている。

そして、容赦なく吹きつける秋風の中で、その明かりを物陰に隠れながらじっと見つめ続ける一人の男がいた。

「由佳里……。結婚なんて絶対許さねえから……」

直哉は、そう小さく呟いやくと、木枯らしが吹き荒れる暗闇の中に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0757d/>

long and deep X'mas

2010年10月9日00時30分発行